

進化論と Woman Question

小川 眞里子

要旨：19世紀後半の英米では女性の本質や女性の権利をめぐる論争が活発に展開され、Woman Question と総称される固有の問題領域が形成された。科学の大衆化が進み、いくつかの学会が女性の参加を認めていく流れの中で、専門性の高い科学の学会は断固として女性の排斥を押し通そうとした。そしてこの女性排斥の根拠として、男女の性差の科学探究が重要課題となり、科学における Woman Question を成すことになった。これに進化論が甚大な影響を与えていることは言うまでもない。今日、フェミニストたちが問題にしている科学の問題、すなわち Science Question in Feminism は、19世紀後半の Woman Question に端を発するものであると考えられる。

はじめに

歴史の世紀といわれる18世紀に続いて19世紀は、さらに地球や生物の歴史的説明にも確信がもたれるようになった時代である。進化論の登場で生命に明確な歴史性が付与されるとともに、19世紀はまた女性の本質をめぐる止むことのない問いが発せられ、女性の存在に関心が集まる時代でもあった。ここに扱おうとする Woman Question（以下 WQ）は、歴史と女性というこれら二つのキーワードが交錯するきわめて19世紀的な諸問題である^[1]。

WQ すなわち女性問題とだけ聞くと、女性に関係するさまざまな問題を指す一般名詞のように思われがちであるが、WQ は特定の歴史的文脈の中で使われるれっきとした固有名詞でもある。OED では Woman の中に Woman Question という項目を設け、「女性の権利をめぐる、とくに19世紀における論争」としている。そして早い時期の使用例としてジョージ・エリオットの1857年の書簡における使用を挙げている。英米において WQ に関係する時代は1857年より先行するヴィクトリア時代の幕開けから、20世紀初頭までくらいを射程に入れ、ほぼヴィクトリア時代に対応している^[2]。

WQ 研究は1970年代から徐々に現れ始め、とくに科学との関係ではフィーの仕事が注目される^[3]。彼女は学術雑誌に掲載された WQ 関係の論文や記事を1860年から60年間にわたって、たとえば『ウェストミンスター・レビュー』で115編、『19世紀』で140編といった具合に丹念に拾い上げ、雑誌全体に占めるそれらの論文総数が膨大であり、WQ が並々ならぬ問題群を形成していることを明らかにした。なかでも進化論と女性の問題は70年代から80年代にまたがってハバード、リチャーズ、ラヴらによって論じられた^[4]。こうした WQ 研究の充実がはかられる中、83年にヘルジンガーらによってまとめられた *The Woman Question* の3巻本は、問題を広い角度から捉えなおした大きな収穫である^[5]。第2巻に法律、科学、仕事、宗教の各章が立てられ、科学にも他の項目と同等の頁が割かれている。その後80年代半ばにケラーとハーディングが、知識の社会構成主義的立場からフェミニズムと科学、ジェンダーと科学といった問題を論じるにおよんで、WQ は歴史的研究から今日の科学と女性に関する研究へ

と架橋されるに至った⁶⁶。科学分野に限っていえば、WQはWoman Question in Scienceからハーディングの著書の表題ともなっている*Science Question in Feminism*へと問題の深化・拡大が図られたといえよう。

WQは女性学一般の研究テーマであるが、それらは当時の科学の状況と切り離しがたく結びついている。ここでは19世紀後半の進化論的枠組みの中で、女性とは何かという女性の本質と地位を問うWQに関わる進化論的側面のスケッチを試みたい。

科学の大衆化

本稿で扱うのは19世紀半ば以降、すなわちダーウィンの『種の起源』出版以降の時代となるが、はじめにヴィクトリア時代の科学の新たな状況について述べておきたい。

ヴィクトリア時代が始まる1837年は科学における専門化と大衆化が十分に達成されようという時であった。1831年ヨークで開催された第一回イギリス科学振興協会で、副会長であり実質的な創立者でもあったウィリアム・ヴァーノン・ハーコートは、王立協会が貴族的な素人集団に成り下がることによって、かつての栄光ある地位を失ってしまったことを批判的に述べ、これに対抗できる組織は新たに立ち上げられた多くの科学の専門学会であるとした。ちょうどハーコートの演説が行われた30年代初めまでにイギリスでは博物学を中心に専門分化した実に多くの学会が設立された⁶⁷。18世紀末からざっと挙げても、医学協会（1773）、リンネ協会（1788）、鉱物学協会（1799）、園芸協会（1804）、内科外科協会（1805）、地質学協会（1807）、気象学協会（1823）、動物学協会（1826）、さらに30年以降も、昆虫学協会（1833）、植物学協会（1836）、顕微鏡学協会（1839）、農学協会（1840）、地理学協会（1841）、民俗学協会（1843）[1863年に人類学協会が分離。この分離の意味については後述]などがある。

その一方で科学の大衆化も進んだ。ファラデーの名前とともに思い起こされる科学の普及活動、すなわち王立研究所の有名な金曜講演やクリスマス講演はすでに1825年と26年に始められている。専門化と大衆化というのは相反するように考えられるかもしれないが、科学が専門に分化することによって科学に関心を持つ人々の裾野は大きく広がり、学会の数の増大とともにのおらずと大衆化が進むことになった。先に述べたイギリス科学振興協会などは、その名称が示す通りまさしく科学の普及をめざして1831年に創立され、年會をイングランド・スコットランド・アイルランドの主要都市（ロンドンを除く）を順次めぐって開催することにより各地の科学振興を図ろうとするものであった⁶⁸。ただし第一回ヨーク大会での会則の採択は、多くの女性の参加者がいたにもかかわらず、男性のみによって行われ女性は会員資格者から排除された。格式あるリンネ協会も女性の正会員を認めるのは20世紀になってからである⁶⁹。王立協会のようにさらに伝統と威信を誇る学会は女性の入会を拒み続け、第二次大戦後まで女性に門戸を開くことがなかった。

アマチュア色の強い博物学関係の学会を中心に女性の入会が徐々に許されてはあったが、女性はさらに専門的な教育をもとめ、また科学知識をも求めた。イギリス科学振興協会の年會も、多くの熱心な女性参加者を惹きつけ、毎年女性の聴衆の扱いをめぐる紛糾することになった。1838年の第8回大会には1,000人をはるかに上回る女性が詰め掛け、その後も女性用チケットの売上げは協会の総収入の10%を占める勢いで、1853年には初めて女性正会員が誕生した⁷⁰。

WQの背景には、単なる知識の受け手であることに飽き足らなくなった女性と、科学をあくまでも男性の独占領域として守ろうとする科学者との確執があることを押さえておく必要がある。

ダーウィニズムと反フェミニズム

科学という切り口でWQに立ち向かう際に中心となるのは、19世紀後半において女性の地位や本質が科学的にどう説明されていたのかということ、すなわち男性に隷属すべき性であるという根拠はいかにして科学から導き出されていたのかということである。

先に述べたように1970年代にWQに関するまとまった研究を成し遂げたフィーは、1860-1920年に刊行された多くの学術雑誌と大衆科学雑誌を精査し、人類学・心理学・医学の各分野からWQを整理しようとしたが、テーマ設定に進化論やダーウィニズムをとくに立ててはいない。しかし19世紀後半の人類学・心理学・医学はいずれも進化論の下敷きなしには成立しえないもので、進化論的枠組みが彼女の論文において暗黙の前提をなしている。

同様のことはヘルジンガーらのWQ研究にも当てはまり、それらは女性の性的能力（セクシュアリティ）、知的能力、発達可能性などを扱いながらも、ダーウィンそのものに切り込むことはしていない。いわばダーウィンはWQを論じている当時の学者たちとはやや異なり、断然アカデミックな存在で、彼の名前に言及されることはあっても、彼の著作そのものが検討されることはなかった。もちろん女性側からのダーウィン批判が皆無というわけではなく、彼と同時代の批判者としてブラックウェルやロワイエの名前を忘れてはならない。しかし19世紀末の話は後にして、ここでは再び20世紀末へ話を戻そう。

いわば聖域とされていたダーウィンの著作を取り上げ、ハーヴァード大学の生物学教授ハバードは「男性だけが進化するのか」という挑発的なタイトルの論文を発表した^[11]。彼女の論文は、WQを扱うという明確な意識からではなく、むしろ進化論がヴィクトリア時代の社会や文化の歪みをどのように反映したものであったかという観点から取り組まれたものであった。それまで社会的側面からのダーウィン批判については民族主義的偏りが指摘されてきたが、ハバードはそれに加えてダーウィンの男性中心主義的偏向を問題にし、ヴィクトリア時代の男女の明確な役割分担、能動的な男性に対しあくまでも受動的な女性というパターンが、彼の性選択の説明に濃厚に反映していることを指摘した。さらに彼女は同様の検討を今日の社会生物学や行動学の研究にまで広げた。ハバードの議論はかなり荒削りなものであり、まもなくリチャーズに批判されることになるが、彼女の指摘は科学におけるジェンダー研究の先駆けをなすものであった^[12]。

ハバードの「ダーウィンの性選択理論は、19世紀フェミニズムの脅威に対するひとりの男性科学者の敏感な応答として生じた」という主張は、ダーウィン批判としていかにもありそうな解釈であるが、反フェミニズムのモチーフを直接ダーウィンに負わせるのは歴史的に見て正しくないというのがリチャーズの批判の骨子である。ダーウィンの性選択理論に認められる男性中心的な偏りを、従順で敬虔な妻とともにヴィクトリア的ブルジョア家庭生活を営む彼にとって慣れ親しんだ環境からくる自然な帰結とするか、もっと積極的な彼の反フェミニズムの意図から帰結するものか考えるのかは、今日なお意見が分かれるところである。

たしかに19世紀も後半からはフェミニストたちの活躍が目立ち始め、およそ70年代までに

はフェミニズムがブルジョア家庭の脅威として人々の目に映るようになった。女性の参政権、高等教育や職業参入への要求は、ジョン・スチュアート・ミルを旗頭とする中産階級の自由主義運動から育ってきた。女性のための高等教育と雇用の改善をめざして1865年ケンジントン協会が結成され、彼女たちが中心になり1866年に女性参政権の請願書がミルに手渡された。1869年にはミルの『女性の隷従』が出版され、運動に拍車がかかった。ロンドン大学やケンブリッジ大学は女性の正式入学をまだ認めていなかったが、女性はそれぞれの大学のコースに出席し学び始めていた。1870年にはオクスフォード大学が初級試験の門戸を女性にも開く決定を下した^[13]。

このような情勢の中でダーウィンの『人間の由来』（1871年）は出版された。したがってハーバードのような解釈の可能性も否定できないが、反フェミニスト的スタンスをダーウィンの執筆動機とするにはやや困難があろう。ダーウィンの性差に関する考察は人間の進化の自然な説明に不可欠だったというだけのことで、ただ結果的にダーウィンが提供した理論的枠組みが、WQを論じる人々に格好のよりどころとなったのであろう。ここで積極的にWQにかかわったのは、ハクスリー、スペンサー、ロマネーズ、ゲデス、トムソンといった人々である。要するに人類学者、心理学者、生物学者らは両性の社会的不平等をダーウィニズムの枠内で裏書しようと努めたのであった。

ダーウィンの性選択理論

次に、実際にダーウィンの『種の起源』や『人間の由来』にどのような議論が展開されているのか簡単に見ておこう。まず『種の起源』であるが、よく例に引かれるのは第4章「自然選択」で説明される性選択である。どうしても擬人的表現が入り込みやすいテーマである上に、能動的男性と受動的女性という典型的なヴィクトリア的パターンが忍び込んでいるとハーバードが非難するのは以下の一節である。

膜翅目の昆虫（ミツバチ、スズメバチ、アリ）の雄は、比類なき観察者であるファーブル氏がしばしば目撃したところによれば、まったくわれ関せずの様子で雄のそばで傍観している雌のために闘い、決着がついて勝者となるとその雌とともに引き上げるのだという^[14]。

この個所だけでは直ちにダーウィンを非難することは難しいのではないかと思われる。しかし続いて

継起する各世代においてある雄の個体は、武器や、防御の手段や、魅力の点で、他の雄にわずかながらまさっており、これらの利点を子孫の雄につたえるのである。

といった記述を読むと、1973年にエレイヌ・モルガンが「男性は思わず知らず、男性を進化の主要軸とみなし、女性を男性のまわりで回転する衛星のように考えている」と不満をもらすのもやや頷けるかもしれない^[15]。

『種の起源』ではさほど顕著でなかったダーウィンの男性中心主義も『人間の由来』になると、かなり明確な様相を呈するようになる。『人間の由来』には「性に関連した選択」という副題がついて、内容は人間の進化というよりむしろ性選択が主題となっている。ダーウィンは「両性の知的能力の差異について」で

男性と女性の間での知的能力の主なる違いは、深い思考、理性、想像力を必要とするもの

であれ、単なる感覚と手の動きを必要とするものであれ、どんな仕事においても、男性の方がすぐれた業績を上げるということに現われている。詩、絵画、彫刻、作曲と演奏の両方での音楽、歴史、科学、そして哲学の各分野において、もっともすぐれた男女の2つのリストをつくり、それぞれに数人の名前をあげるとすれば、それらは比較にならないだろう^[16]。

と述べて、男性の平均的知能は女性のそれよりも高いと考えてよいだろうと結論している。教育の機会など男女の置かれてきた環境の違いを一切考慮することなく、ダーウィンが科学的事実としてこのように語ってしまうことは、関連分野への影響を考えたとき見過ごせないものがある。そしてさらにそのあと彼は以下のように述べた。

……敵を避け、彼らを攻撃し、野生動物を狩り、武器を発明して作り上げるためには、観察力、理性、発明の才、想像力などの高度な心的能力の助けが必要である。これらのさまざまな能力は、このようにして常に試練にさらされ、成人男性の間での強い淘汰にさらされてきたであろう。しかも、それは、人生のこの同じ時期に、とくに使用によっても強化されてきたであろう。そうであるとすると、これまでにはしばしば出てきた原理に則って、主に男の子だけが対応する時期にそれを受け継ぐ傾向があるかもしれない^[17]。

ダーウィンの表現を少しあからさまに言えば、男性の有する高度な精神的能力は競争を通していっそう磨きがかかっていく一方、もし娘に父親の資質がまったく伝わらなかったら、女性の精神は退化してしまったということになる。人類の歴史で進化の担い手は男性で、女性はかろうじて男性に引きずられてきたかのようである。

このようなダーウィンの著述に対し同時代の女性たち、とりわけ元気を得つつあったフェミニストがまったく手をこまねいて見ていたわけではないが、その批判は今日の観点とはかなり異なっている。男性生物学者に19世紀という時代的制約があったのと同様、批判する女性の側にも時代的制約があったと考えられる。まず挙げられるのはアメリカのアントワネット・ブラックウェルである。彼女は1875年、『自然界のオスとメス』を出版し、性差に関するスペンサーとダーウィンの結論である「進化の過程を通して、男性は女性よりも優れた存在となってきた」ということを批判し、両性は総体として平等であることを、自然界の生物全般に関する観察から明らかにしようとした^[18]。語り口はきわめて穏やかで控えめである。一般的な平等を言いたてるのではなく、ヴィクトリア時代の性差論を受け入れながらも、男女に総体として優劣はないというのが彼女の精一杯の主張であった。

次にダーウィンの『種の起源』のフランス語訳を1862年に出版したフェミニスト、クレメンス・ロワイエを挙げておこう。彼女がフランス語版に勝手に付した長い前書きがダーウィンの『種の起源』に対する人々の反感をさらに募らせることになったとして、これまでは彼女の翻訳全体が否定的に語られてきた^[19]。しかし近年の詳しい研究でダーウィンとの関係も当初はけっして悪いものではなかったことが明らかになっている^[20]。彼女は進化論を支持してダーウィニズムを人間社会に適用した論考をまとめ、1870年に『人間と社会の起源』として出版し、この中に女性の役割についても興味深い洞察を記した。しかしその翌年、ダーウィンの『人間の由来』が出版されると、彼女の著作はまるでダーウィンの本の焼き直しのごとく誤解され、期待するほどの成功を収めることは出来なかった。しかし彼女は1870年に人類学会の最初の女性正会員として受け入れられ、活発なフェミニスト進化論者として活躍することになった。人類学会は1859年に創立され頭蓋計測学で有名なポール・ブロカが事務局長を務めてい

た^[21]。以下は彼女が1874年パリの人類学会で口頭発表したものである。

今日に至るまで、法律同様科学ももっぱら男性によって形成され、女性は本能や情熱を欠き、自身の関心さえ見失っている決定的に受動的な存在とみなされてきている。すなわち彼女は、望まれるどのような形にでも成形可能な100%の塑性材料であり、彼女が受ける教育に対して、あるいは法律や慣習や世論だからと彼女が甘受してきた規則に対して対抗する内的な力を欠いた存在であるとみなされてきた^[22]。

この時代の人類学は、他のどんな分野にもまして男性の優位、女性の劣位を押し出した科学であった。したがって学会は彼女の論文の印刷を渋ることになるが、彼女は学会の重鎮ブロカに粘り強く掛け合った。結局のところ彼女の原稿は校正段階で外されてしまうが、もっとも活発なWQ論争の場であった学会に小さな風穴を開けようと彼女は奮闘したのだった^[23]。

女性の参加と人類学協会

19世紀後半、女性を意図的に学会から締め出そうとする動きは強く存在した。女性には科学探求を遂行するような知的能力は備わっていないという断定、あまりに高度な知的活動は女性本来の任務である妊娠・出産を困難にするという懸念、また女性が学会に参加したりすれば白熱した議論など望めなくなるという不安から積極的に女性の排斥を打ち出した学会も少なくなかった。王立協会やリンネ協会の例については先に述べた。しかしその一方で19世紀半ばは科学の大衆化の時代でもあった。すでにイギリス科学振興協会も1853年には女性の正会員を受け入れている状況にあって、とりわけ女性からの関心が高い民俗学協会が正規の女性会員をやがて認めることは時代の流れであった。ヴィクトリア時代の女性ジャーナリストでありながら反フェミニストを貫いたエリザ・リン・リントンも熱心な例会参加者の一人であった^[24]。

民俗学協会に女性の入会を認めるかどうか、最初に議事に載せられたのは1860年のことであった。会長になってまもないジョン・クロフアードは女性の教育の著しい進展に鑑みて、彼女たちの参加を認めるべきだと考えていた。これには会長として会員確保の思惑も絡んでいたようである^[25]。そしてこの動きの阻止に動いたのが他ならぬトーマス・H・ハクスリーと1859年以来民俗学協会の書記の一人を務めていたジェームズ・ハントであった。ハントは1863年に民俗学協会とは袂を分かち、ロンドン人類学協会を設立して自ら会長を務めた。彼は当時注目を集めつつあった人類学に魅せられており、人類学をも包摂する形で民俗学協会の基盤を拡張するよう働きかけたが、会員の多くは人間の起源や古さについて議論することを好まなかった。それがハントの民族学協会脱会の理由の一つとされる。しかし女性の入会問題も原因の一端であったろう。彼は学会の権威は女性を排除してこそ堅持できると考えていたからである^[26]。

他方ハクスリーであるが、女子教育については一定の理解をもっていた彼も、専門の学会となると別だと考え、親しい友人チャールズ・ライエルに相談を持ちかけた。するとライエルは「地質学協会に女性の入会を認めれば、彼女たちを創造説とは違う考えに触れさせることによって、また既成の宗教からの好ましくない影響を中和することによって、いわゆる地質学の大義を推し進めることになるかもしれません。あの詭弁家、オクスフォードの司教が熱心に説いて回っている教義についても、女性は賛否両方の議論を聞くという教育上権威ある場には立ち入ることが許されてはおりませんから」と、女性の入会にやや賛成の意見を書き送ってきた。こ

れに対しハクスリーは「専門家の議論の場である地質学協会を、教育の場ともしようなどんでもない話です。そんなことをすれば学会本来の目的は台無しです」と反論し、さらに「女性の六分の五は人形の段階で進化が止まっているのです」と付け加え、女性排斥の態度を崩すことはなかった^[27]。

結局ハクスリーやハントを押さえて協会は女性に門戸を開くことになったが、それも1868年ハクスリーが会長になるとただちに撒き返しが図られ、女性は締め出されることになった。一貫して女性を排斥してきた人類学協会に対抗し、学術面で遜色のない民俗学協会を再生するには、それが必要条件だとハクスリーは認識したのだった。これに対し協会の常連であったリントンは、反フェミニストの立場に立っていたが、ハクスリーに手紙を送り女性の数少ない学びの機会を奪わないで欲しいと願い出た。しかし例会は完全に男性の会合となり、わずかに特別な公開講座だけが女性に開かれることになった^[28]。

ダーウィン自身の性選択の記述ばかりでなく、ダーウィンのブルドックを自認しダーウィニズムの最有力推進者であるハクスリーがもっとも過激な女性排斥論者であることを見ると、進化論がWQの中でも反フェミニズムの元凶だとすることもあながち的外れではないだろう。そしてハントが設立した人類学協会は、彼自らが先頭に立って大陸の頭蓋計測学者たちの成果を紹介した。まずはカール・フォークトやポール・ブロカの著作が翻訳出版された^[29]。女性の頭蓋骨が小さいことを女性の知的能力の劣等性と結びつける議論が横行する中、パリでロワイエが反論を試みたのと同じ年1874年に、ロンドンの人類学協会の例会でも一人の女性が反論に立った「男性に劣らぬ女性の体力と知力」と題された発表は主として科学分野で活躍した女性を歴史的に紹介したものであった^[30]。彼女の発表に続く質疑応答は、どのように優れた女性が過去に存在していようとも、女性の頭骸骨が頭囲のみならず内容量も男性に比べ小さいという科学的事実の前には取るに足らぬことという評価に終始していた^[31]。女性排斥の牙城として創立されてわずか10年、四面楚歌の中で、例会の講演者となったエマ・ウェリントンという女性については今のところ何も明らかになってはいない。

おわりに

フェミニズムと科学、ジェンダーと科学といったテーマが科学史研究の一つの分野を形成するようになって20年近くになる。最初は「科学における女性」という過去の女性科学者の発掘に関心の中心があったのが、ケラーやハーディングの著作をきっかけに、今日では科学知識の中味にまで研究が深められてきた。そのように研究テーマは時代とともに変化してきているが、欧米の議論全般の底流をなすのは、女性も科学的な能力資質において劣らないという執拗な証明である。

科学的能力において男性に劣らぬことを、なぜそんなに執拗に示さないといけないのだろうかかなど少々疑問に感じつつ、筆者はここ10年ほど欧米の研究書にあたってきたが、続々と出版される文献に当たっていだけで忙しく、大きなパースペクティブで過去を振り返ることができないままできた。最近になって性差をキーワードに歴史的概観を行う機会を得て、大きな山場が19世紀後半にあることに改めて気づくことになった^[32]。それがWQと総称される問題である。なにか機会をとらえてその問題の輪郭くらいは頭にいれておかなければと思いたち、これは最初のスケッチの試みである。問題の広い裾野からすると議論はまだほんの入り口に立っ

たばかりである。

議論は筆者の関心領域と重なる進化論関係が中心にならざるをえなかった。心理学や医学関係については手付かずである。しかしことを性差に関連した事柄に限れば、WQの中で進化論が果たした役割はけっして小さくないと確信している。

註

- [1] Christina Crosby, *The Ends of History: Victorians and "The Woman Question"* (New York and London: Routledge, 1991), Introduction.
- [2] 註3、註4で見ると、Feeの学位論文は1860-1920年を射程に入れ、文化全般を扱ったHelsingersらは1837-1883年を射程に入れている。生物学的関心が中心となると『種の起源』(1859)出版以降に、とりわけ医学・心理学的議論は19世紀末から20世紀にまたがっている。OEDの説明にも関わらず、WQの意味は定めにくい。リサ・タトル著 渡辺和子監訳『新版フェミニズム事典』明石書店 1998年 416頁によれば、「広く19世紀に使われた語で、フェミニズム以前にも女性の問題を意識していることを表す」とあるが、今一つ明確でない。
- [3] Elizabeth Fee, "The Sexual Politics of Victorian Social Anthropology," in Mary S. Hartman and Lois Banner ed., *Clio's Consciousness Raised: New Perspectives on the History of Women* (New York, Evanston, San Francisco, London: Harper & Row, Publishers, 1974), pp. 86-102; Idem, "Science and The Woman Problem: Historical Perspectives," in Michael S. Teitellbaum, *Sex Difference: Social and Biological Perspectives* (New York: Anchor Press, 1976) pp. 175-223; Idem, "Science and The "Woman Question" 1860-1920: A Study of English Scientific Periodicals," Ph. D. Dissertation, Princeton University, 1978; Idem, "Nineteenth-Century Craniology: The Study of the Female Skull," *Bulletin of the History of Medicine*, 1979, Vol. 53, pp. 415-433.
- 本稿の註にとくに挙げなかったが参照した重要な文献は以下の通り。荻野美穂「フェミニズムと生物学：ヴィクトリア時代の性差論」奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第4号 1988年 134-122; シンシア・イーグル・ラセット著 上野直子訳『女性を捏造した男たち』工作舎 1994年; Sally Gregory Kohlstedt and Mark R. Jorgensen, "The Irrepressible Woman Question: Women's Responses to Evolutionary Ideology," in Ronald L. Numbers & John Stenhouse, *Disseminating Darwinism: The Role of Place, Race, Religion, and Gender* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).
- [4] Ruse Hubbard, "Have only Men Evolved?" in Ruth Hubbard, Mary S. Henifin & Barbara Fried, *Biological Woman-The Convenient Myth: A Collection of Feminist Essays and a Comprehensive Bibliography* (Cambridge, MA: Schenkman Publishing Company, 1982) 初出はHubbard ed., *Women Look at Biology Looking at Women* (Boston, 1979) のようである。Evelleen Richards, "Darwin and the Descent of Woman," in David Oldroyd ed., *The Wider Domain of Evolutionary Thought* (Dordrecht and Boston: D. Reidel Publishing Company, 1983), pp. 57-111. Rosaleen Love, "Darwinism and Feminism: The "Woman Question" in the Life and Work of Olive Schreiner and Charlotte Perkins Gilman," Oldroyd, *ibid.*, pp. 113-131.
- [5] Elizabeth K. Helsingers, Robin L. Sheets & William Veeder, *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837-1883* (New York & London: Garland Publishing, INC, 1983), Vol. 1, Defining Voices; Vol. 2, Social Issues; Vol. 3, Literary Issues.
- [6] Evelyn F. Keller, *Reflections on Gender and Science* (New Haven and London: Yale

- University Press, 1985) [幾島幸子・川島慶子訳『ジェンダーと科学』工作舎 1993年]. Sandra Harding, *The Science Question in Feminism* (Ithaca & London: Cornell University Press, 1986). フェミニズムと科学、ジェンダーと科学については、拙稿「フェミニズムと科学／技術」岩波講座 科学／技術と人間『思想としての科学／技術』岩波書店 1999年 151-180頁参照。
- [7] 科学の普及には学会の創立もさることながら、安価な学術誌の流通の寄与するところもきわめて大きい。拙稿「進化論の文化的基底」代表者伊東俊太郎『科学の文化的基底(2)』国際高等研究所報告書(印刷中)。第二節「博物学関係の学会創設ラッシュと雑誌出版ラッシュ」参照。
- [8] Jack Morrell and Arnold Thackray, *Gentlemen of Science: Early Years of the British Association for the Advancement of Science* (Oxford: Clarendon Press, 1981), "Peripatetic Power," pp. 97-109.
- [9] D. E. アレン著 阿部治訳『ナチュラリストの誕生』平凡社 1990年 264-271頁。各地に誕生した野外クラブの運営をめぐるアレンは次のように述べている。「女性は、真剣に興味をもつことがほとんどできないという理由で除外され、無視され、お祭的な行事にだけ受け入れられたのである。さもなくば、科学は男の仕事であり、クラブは男どうしが知的な角のぶつけあいをするためのパーティであった。つまりそこは、研究同様に男性のために特別に確保された場所であり、女性はけっして侵入してはいけない場所であった。女性の研究は奨励されていたし、彼女らの植物学での業績は見事だともいわれ、リヴァプール・クラブなどでは競争のために賞さえ出されたが、裏では、誰もお飾り以上の存在としては認めなかった。」なおリンネ協会に再三会員申請をして、ついに1904年に評議会を屈服させたのはオーグルヴィ・ファークワソン夫人である。
- [10] Patricia Phillips, *The Scientific Lady: A Social History of Women's Scientific Interests 1520-1918* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1990), pp. 200-207.
- [11] Ruth Hubbard, "Have Only Men Evolved?" in Ruth Hubbard, Mary S. Henifin and Barbara Fried eds., *Biological Woman-The Convenient Myth* (Cambridge: Schenkman Publishing Co., 1982) pp. 17-46. 本論文の初出は1979年である。
- [12] Evelleen Richards, "Darwin and the Descent of Woman," in David Oldroyd and Ian Langham eds., *The Wider Domain of Evolutionary Thought* (Dordrecht: Reidel Publishing Co., 1983) pp. 57-111.
- [13] Burstyn によれば、1860年代後半にはいくつかの都市で高等教育の特別プログラムが女性のために生まれ、ケンブリッジ大学の学位試験につながる女子のカレッジが1869年に Hitchin に設立されたという。Joan N. Burstyn, "Brain and Intellect: Science Applied to a Social Issue 1860-1875," *Actes Tome IX Histoire des Sciences de L'homme* (Paris: Albert Blanchard, 1971) pp. 13-16.
- [14] この引用部分は『種の起源』第4版に挿入されたもので、邦訳(八杉龍一訳『種の起源』岩波文庫)は初版の訳なので該当箇所はない。そのすぐあとに続く部分は(上)122頁参照。
- [15] Elaine Morgan, *The Descent of Woman: The Classic Study of Evolution* (London: Souvenir Press, 1972) p. 9.
- [16] ダーウィン 長谷川眞理子訳『人間の進化と性淘汰Ⅱ』文一総合出版 2000年 399頁。淘汰という言葉より選択という言葉の方が適切と考えられるところなどで、適宜訳文を少し変更したことをお断りしておく。
- [17] 前掲書(註16)400頁。
- [18] Antoinette Brown Blackwell, *The Sexes Throughout Nature* (New York: Putnam's Sons, 1875); Rosalind Rosenberg, "In Search of Woman's Nature, 1850-1920," *Feminist Studies*, vol. 3, 1975, pp. 141-154. Kohlstedt(註3)も参照のこと。
- [19] Thomas F. Glick ed., *The Comparative Reception of Darwinism* (Austin and London: University of Texas Press, 1972) pp. 125-127.
- [20] Joy Harvey, "Strangers to Each Others: Male and Female Relationships in the Life and

- Work of Clémence Royer,” in Pnina G. Abir-Am and Dorinda Outram eds., *Uneasy Careers and Intimate Lives: Women in Science, 1789-1979* (New Brunswick and London: Rutgers University Press, 1989) pp. 147-171.
- [21] ブロカについては、S. J. グールド 鈴木善次・森脇靖子訳『増補改訂版 人間の測りまちがい』河出書房新社 1998年「第3章 頭の測定 ポール・ブロカと頭蓋学の全盛時代」を参照。
- [22] Harvey, *op. cit.*, p.147.
- [23] *Ibid.*, p. 163.
- [24] Evelleen Richards, “Huxley and Woman’s Place in Science: The Woman Question and the Control of Victorian Anthropology,” James R. Moore ed., *History, Humanity and Evolution: Essays for John C. Greene* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) p. 273.
- [25] Richards, *Ibid.*, p. 255.
- [26] *Ibid.*, p. 254. Dictionary of National Biography, CD-ROM, James Hunt の項目。
- [27] *Ibid.*, pp. 255-256.
- [28] *Ibid.*, pp. 253 & 273-275. ジャーナリストとして自立した女性が女性の解放や高等教育に反対したということで、ヴィクトリア時代のパラドックスとして注目される。Evelleen Richards, Redrawing the Boundaries: Darwinian Science and Victorian Women Intellectuals,” in Bernard Lightman, *Victorian Science in Context* (Chicago and London: University of Chicago Press, 1997, pp. 119-142. なおハクスリーとの関連で言えば、彼の *Man’s Place in Nature* を意識して執筆された以下の論文を挙げておこう。E. Lynn Linton, “Woman’s Place in Nature and Society,” *Belgravia*, Vol. XXIX, 1876, pp. 349-363.
- [29] Elizabeth Fee, “Nineteenth-century Craniology: The Study of the Female Skull,” *Bulletin of the History of Medicine*, Vol. 53, 1979, pp. 415-433. Carl Vogt, trans. By James Hunt, *Lectures on Man: His Place in Creation, and in the History of the Earth* (London, 1864); Paul Broca, trans. by C. Carter Blake, *On the Phenomena of Hybridity in the Genus Homo* (London, 1864).
- [30] Emma Wallington, “The Physical and Intellectual Capacities of Woman Equal to Those of Man,” *Anthropologia*, Vol. 1, 1873-5, pp. 552-559.
- [31] “Discussion,” *Ibid.*, pp. 560-565.
- [32] 拙稿「性差の読み方」『比較文明』Vol. 16, 2000年, 61-73頁。